

「底が突き抜けた」時代の歩き方 293

誰が原爆投下に罪の意識を感じたのか

「快く思うわけがない。でも職務を忠実に果たしたのだ。後悔しているかって？ その質問に答えるべき立場なのは、大統領だったトルーマンだ」

「私は、確かに原爆を落とすか持ち帰るか、決断する立場にいた。だが燃料がなかった。長崎に落とさなければ、重たいファット・マンを抱えて沖縄に緊急着陸することもできなかった」

「私が一つの都市に死をもたらし、破壊したことに、いくらかの責任があることについてだが……。私は、苦悩で寝付けないとは言えない立場をとり続けなければならない。悩むわけにはいかない。私の人生が、それを許さないのだ。はたして、答えになっているだろうか」（1945年8月9日、長崎原爆の投下指揮官としてB29爆撃機「ボックス・カー」に乗り込んだ、フレデリック・アシュワース(87)）

原爆投下をめぐる朝日新聞の99・8・2付連載記事は、以上のように原爆投下に直接かかわった元隊員たちの声を拾い上げている。広島に原爆を落とした「エノラ・ゲイ」には12人が、長崎の「ボックス・カー」には13人が乗り込み、6割以上がすでに死去している。その隊員たちの「原爆投下に対する思い」が、次のように掲載されている。《広島機の副操縦士だった、故ロバート・ルイス氏は投下直後に「マイゴッド(おおっ)！」と叫んだ。後に続く言葉が何だったか、記憶は隊員によって違う。「見ろ、やったぞ」という説。「われわれは何ということをしてかしたのか」と悔悟の言葉だったという説。

真相は確かめられない。戦後、ルイス氏は「自分は戦争を終結させた英雄か、史上最悪の破壊に手を染めた嫌われ者か」と悩み、70年代に催眠療法を受けるようになり、83年に世を去った。

ただ一人、広島、長崎両作戦の投下機にレーダー監視員として乗り込んだヤコブ・ベッサー氏は、92年に死去するまで「日本本土が侵攻されれば、もっと多くの死者が出た」という立場を崩さなかった。

広島機の機長だったポール・ティベッツ氏(84)は、二発の投下作戦を実行した509混成航空群の最高指揮官でもあった。今も、原爆投下の意義を語り続ける代表格だ。「原爆使用を非人道的と決めつける者は、真珠湾攻撃の残忍さも非難すべきだ」と主張する。

長崎投下機の機長だったチャールズ・スウィーニー氏(79)は、終戦の翌月に長崎を訪れた。

「爆心地を歩き、疲れた人々を観察して感じたのは、良心のかしゃくでも罪悪感でも

ない。原爆が日本やドイツでなく、米国の手中にあったことを神に感謝する気持ちだった」と著書に記した。

長崎原爆の投下レバーを引いたカーミット・ビーハン元爆撃手は85年、「被爆者に謝罪したい」と長崎市へ訪問を希望する手紙を出した。被爆者の反対で実現しなかった。

「自分が原爆を使った最後の人間になることを望む」と訴えながら、4年後に死去した。

「あのキノコ雲は、白くはなかった。薄いピンク色だった。雲のしんから外に、光線が広がっていった。恐怖で、胃の奥あたりがこわばった」

フレッド・オリビ氏(77)は、シカゴ市の自宅で、機上からガラス越しに感じた長崎原爆を振り返った。広島作戦を含め、最年少の副操縦士だったという。

「ハプニングとミスが重なった作戦だった。それでも歴史的意義があった。悔いる気持ちなどない」

よどみない口調とは裏腹に、戦後の行動には迷いが垣間見える。

長崎市には、一度も訪れたことがない。

「いまも（原爆の後遺症に）苦しんでいる人たちがいる場所に、行きたいと思うわけがない。行ったとしても、彼らにかけろべき言葉などないからだ」

まず極秘の原爆開発プロジェクトがあった。その最高責任者はグローブズ将軍であり、この計画の内容は、大統領やスティムソン陸軍長官等のごく限られた者にしか知られていなかった。アルミなどの戦略物資から建設プロジェクト、航空機産業まで軍の調達問題を徹底調査して、軍の契約業者が暴利をむさぼったり、陸・海軍が特定業者を優遇したりすることを防ぐための、それ故に軍部から最も恐れられている上院の国防計画調査委員会のトルーマン委員長ですら、このプロジェクトの内容は知らなかった。トルーマンが44年に副大統領になっても、まだ知らされていなかった。彼がマンハッタン計画の秘密を知らされるのは、ルーズベルト大統領が死去して大統領に就任してから2週間後の45年4月25日の、投下前のわずか3、4カ月前のことだった。それほどに秘密が徹底されていたから、プロジェクトに関与する多くの作業員たちも、自分たちがどのような仕事に従事しているのかは全く知らなかった。

したがって、広島、長崎への原爆投下のために選ばれた隊員たちも、この特別任務の内容をほとんど直前に知らされたと推測される。だが原爆投下に肯定的か否定的かにかかわらず、原爆投下というプロジェクトにとっての最大かつ最終の場面に身をもって登場することになったとき、同時に人間にとっての最大の苦悩のなかにも身をもって登場せざるをえなかったのである。先に挙げたように、極秘のプロジェクトなど知る由もなく、それまで全く無縁であった者たちが投下隊員に抜擢されて、直接的な投下に従事することによって、下界の大惨劇を目撃せざるをえなくなる悪夢を一身に背負わされるといふ矛盾の最前線に立たされてしまうことになったのだ。数年間の計画に携わってきた者たちは投下の瞬間にすべて手を引き、それまで計画には全く無縁であった者たちが投

下するという最も嫌な役回りを引き受けさせられることによって、代表して原爆の悪の全てを背負わざるをえなくなる場所に放り込まれるという残酷さを味わいつづけなくてはならなかった。

計画のトップのグローブズ將軍は原爆投下に苦悩するどころか、議会の査問を受けなくなったことに安堵していたようにみえるし、またトルーマン大統領の投下に対する苦悩にしても、二つの原爆投下がもたらした20数万人の死者というとてつもない数字に対する想像力の域を出ていなかったと思われる。しかし抜擢された投下隊員たちは投下された下界にいたわけでもなければ、その大惨事を目の当たりにしたわけでもなかったとしても、自分たちの手で投下した原爆から、これまでに誰も立ち会ったことのない核爆発によって、「薄いピンク色」状に湧き上がっていく巨大なキノコ雲に自分たちも包み込まれる体験を上空で味わうことで、いうまでもなく原爆投下に身を浸していたのである。想像力ではなく、想像を絶する巨大なキノコ雲を身をもって目撃し、そのキノコ雲の中に折り重なっている無尽蔵の死体が折り重なっているのを、否が応でも想像せざるをえなくなっていたのだ。

想像力の場合は、想像しないでおこうとすればいつだってやめることができる。トルーマン大統領の原爆投下を想像することで突き上がってくる苦悩は、想像されないあいだは忘れ去ることができた。彼の想像力はどうしても想像せざるをえないような種類のものであったかどうか。トルーマンの想像力と比較して、投下隊員たちの苦悩は想像力ではなく、自分たちの手で投下する場所に身を置いてしまったことの記憶に由来していた。想像力は止めることができるが、記憶は止めることができなかった。つまり、想像力によって空想の中で浮かぶキノコ雲はいつでも消し去ることができるが、現実にも身を置いて目撃したキノコ雲は消そうにも消すことができなかった。網膜の裏に張り付いた記憶は、自分の力や意志ではどうすることもできなかった。

原爆開発に数年かかわりながら、最後の投下の段階で携わらなかったために、あたかも自分の手を汚したようには感じずに済まされるプロジェクトのメンバーたちと、プロジェクトには一切無縁でありながら、決定的な投下の場面にもみ避けようもなくかかわってしまった爆撃隊員たちとの間に生じている、組織集団の分業形態がもたらす理不尽ともいべき落差は、爆撃機と一緒に乗り込んだわずか12、3人の間でもその位置関係において生じているのが見て取れる。一個の爆撃機に共に乗り込んだ時点で一蓮托生であったにもかかわらず、投下レバーを直接自分の手で引く者と、指示のみを下す側に立つ者との微小な差異がやはり鮮明に浮かび上がっており、当事者にとってはその微小な差異が巨大な意味を孕むことになるのである。

広島機の機長ポール・ティベッツや、長崎機の機長チェールズ・スウィニーらが、「原爆投下は多くの米兵の命ばかりか、日本人の命まで救った」などの主張をずっと繰り返すのに対して、「長崎原爆の投下レバーを引いたカーミット・ビーハン元爆撃手は85

年、『被爆者に謝罪したい』と長崎市へ訪問を希望する手紙を出し（…）『自分が原爆を使った最後の人間になることを望む』と訴え」ることの、正反対にみえる態度の違いはおそらく、彼らの思想やイデオロギーに由来するよりも、原爆投下の位置関係に多く由来すると考えられる。指示を出すティベッツ機長らはいわば言葉で投下にかかわっていたとすれば、ビーハン元爆撃手は投下レバーを引く手という身体で投下にかかわっていたのだ。

いうまでもなく言葉は現場から遠ざかろうとするけれども、身体の方は現場に近づこうとする。というより、身体は現場そのものである。ビーハン元爆撃手の投下レバーを引く手は、投下された地上で悶え苦しみながら、息が途絶える瞬間に救いを求めるように差し出されていく無数の手とつながっていたように思われる。そう、彼の手は投下される地上にまで伸びていたのに対し、ティベッツ機長らの言葉はあくまでも爆撃機の内部にとどまっていたのだ。もちろん、手は投下レバーを引くだけで、投下される原爆に重なり合って地上に落ちていくわけではないと考えられるし、また投下を指示命令する言葉は投下される原爆のかたちをとって地上に落ちていくと考えられないわけでもない。しかしながら、投下を命令する言葉は自分の口から発されて自分の許に戻ってくるとは限らないのに対して、自分がどう思おうとも、一度投下レバーを引いた自分の手は身体につながったままである。この厳然たる事実は、投下を命令する言葉の苦しみは言葉と共に行方不明になることができるが、投下レバーを引いた手の苦しみはいつまでも手と共に自分につながっていることをあからさまにしていた筈だ。

なぜ、プロジェクトのトップのグローブズ将軍や、原爆製造に主要な役割を果たした科学者たちが、いや日米戦争をたたかっている最高司令官のアメリカ大統領が共に爆撃機に乗り込んで、自らの手で投下レバーを引こうとしなかったのか。プロジェクトに最大にかかわった者たちこそが、最後の凄惨な打ち上げ花火の点火にまでかわるべきではなかったか。原爆開発に意義を見出し、誇りを抱いていたのであれば、最後の投下の瞬間にまで立ち会って、その原爆投下が地上にどのような影響をもたらしたのかを、最後まで見届ける必要があったのではないか。もちろん、これらの問いはプロジェクトの分業形態の前では一笑に付され、孤立に晒される。原爆ができあがった段階で、投下部署の外部発注に出されるのが、あらゆる分業形態の鉄則だからだ。しかし、原爆の製造と投下が分業されているありかたこそが、戦争をより凄惨なものにし、原爆投下などをより容易にしていっただけということだけは決して忘れてはならない。

あの日米戦争以降、二度と原爆はどこにも投下されてはいないけれども、空爆などのかたちで兵器はますますハイテク化して、ますます残虐性を帯びている。ここでも当然、原爆開発一投下の分業形態は冷酷に貫かれているが、分業形態の冷酷さそのものは戦争以外の民間分野においても、隆盛を極めている。もう一般化していると思われるが、企業からの依頼で、そこの社員になり代わってお客に電話をする電話代行の会社があり、

若い女性たちがアルバイトとして採用されている。仕事の内容はさまざまな会社の「社員」としてアンケートを取ったり、契約を受けたり、多いときは一日7時間に100本前後の多忙さで、いろいろな役柄を努める。たとえば、製品の故障や不手際等で、顧客リストに載っている全員に謝罪の電話をかけ続ける仕事も回ってくる。当然、客の好意的な反応もあれば、客の激怒や苦情をくどくどと聞かされる場合にも遭遇する。もちろん、ひたすら「申し訳ございません」を繰り返すほかない。

「人の代わりに怒鳴られるのが、こんなにつらいとは思いませんでした。一生分謝った気持ち」と漏らす女性もあり、ストレスが激しいために毎日5、6人のアルバイトが入れ替わる。彼女たちのいたたまれなさは謝罪の電話をしているのが会社とは全く無関係の人間であることを、客たちが知らない点にある。会社の人間だと思って客はいたわってくれたり、怒ったりしているのに、それらの声はほとんど会社には届かず、彼女たちの胸に収められるのだ。謝罪しなければならぬのはまず製品開発本部であるのに、謝罪は会社の中の別の部署が引き受けさせられ、会社の中の無関係はやがて社外にまで延びていき、電話代行会社に言葉の謝罪のみが委ねられていく。不誠実さ、責任感のなさに付け加えて、なによりも商品の売買を通じて、客とコミュニケーションし合い、会社も客も共に成熟していこうという発想が欠如しているのが、致命的なのである。

このアルバイトの女性たちのどこにも持って行き場のないやりきれなさ、原爆投下隊員たちの思いとはどこかで通じ合っているにちがいない。彼女たちの謝罪するだけの仕事と、隊員たちの原爆を投下するだけの任務。本当に謝罪しなければならない筈の会社の無言と、投下の責任を本当に負わなければならない原爆開発プロジェクトの、直接投下との切断。つまり、謝罪をかかえこもうとしない会社と、投下責任を負おうとしないプロジェクト。こういうふうに見ていくと、原爆開発―投下の分業形態は当然ながら、一般企業等のありかたにまで貫かれていくだけでなく、人間と人間の関係のしかたが分業をどうしても無機的なつながりとしてしか発生させざるをえなくなっている社会の問題にまで突き入っているのが感じられる。そうすると、「原爆」は開発―投下のプロセスにみられる分業のありかたを明らかにしているだけでなく、現代社会の中で無機的に細分化されている分業のありかたにおいてこそ、可能になったのだといわざるをえなくなる。原爆が開発され、投下されたという問題は、それが可能となる無機的な分業形態を前提にしていたのであり、その無機的なプロセスのありようこそ、本当の意味での「原爆」問題といえるかもしれない。

2002年3月27日記